

労ある秋の夕暮れ

——『うつほ物語』「内侍督」の表現——

大井田 晴彦

はじめに——「そらごと」の世界——

『うつほ物語』第十一卷「内侍督（初秋）」は、宮中を主な舞台とした、あて宮入内後の人々の動向を語る巻である。かつて、この巻の主題と方法については論じたことがある。旧稿^①では長篇における、前半部と後半部を繋ぐ、重要な転換点として位置づけた。朱雀帝と俊蔭女、仲忠と藤壺を中心に、厳しい政治の現実によつて切り裂かれた理想的な男女が、帝の主導する「そらごと」の、非日常的な時空のなかで変わらぬ愛情を確認し、新たな関係を結び直していくのが「内侍督」の主題であり、帝や藤壺といった最高の理解者・支援者を得て、秘琴の一族はさらに繁栄を遂げてゆくことになる。

この「内侍督」は、早くから他の巻々との不整合や矛盾が指摘されてきた巻である。すなわち、「涼にあて宮、仲忠に女一宮」という、いわゆる「吹上の宣旨」が、逆になっていること、また、あて宮入内の衝撃で絶命したはずの仲澄や、出家した仲頼ら

が、依然として宮中で活躍していることなど、不審点が多い。この奇妙な現象は、成立論の立場から、前後の巻が改修されていくなかで、「内侍督」が取り残されたゆえに生じたものと説明されてきた^②。そして、「内侍督」が改修を逃れたのは、偶然によるというよりも、手を加えることが不可能なほどに、その表現が彫琢と洗練を極めているためと考えるのである^③。確かに、この巻の表現、特に人々に取り交わされる機知に富む会話は、和歌や漢詩文の知識を縦横に踏まえており、まだ十分に解釈されていない箇所も多い。また、秋の景物がふんだんに織り込まれることで、恋物語をいつそう情趣豊かにもしている。巻の構成もきわめて緊密であり、作者の周到な計算がうかがえるのである。いったい、「内侍督」では、いくつかの鍵語や動機が繰り返され、変奏されてゆくことで、物語が展開し、主題が明確に形成されてくる傾向が顕著である^④。本稿では、そうした表現の固有性に即することで、「内侍督」の問題を再考するものである。

一 秋風

「内侍督」は、「七月ついたちころ」、仁寿殿を訪れた帝と女御の珍妙なやりとりから始まる。暑さでしばらく参上でできなかったという女御の口実を帝は「そらごと」と決めつけ、右大将兼雅に思いを寄せているのだらうと疑う。さらには、二人が人目を忍んで愛し合うのもつともだ、咎むまい、などと共感と理解をさえずす。兼雅・仁寿殿という理想的な二人の関係から、さらに話題は仲忠と藤壺へと移る。「心憎き所ありて、恥づかしと思ふ人(仲忠)に、そらごとすと思ほゆるなむ、いとほしき」(三七九頁)と、「吹上の宣旨」が反故になった不明を恥じる帝は「その今宮(女一宮)をやは取らせたまはぬ」と仲忠への降嫁を女御に切り出している。すなわち、「そらごと」となった、宣旨をいかに覆し、仲忠と藤壺との関係を結び直し、ひいては帝の威信を回復するか、これがこの巻で帝に課せられた課題といえよう。まず「そらごと」が、一つの鍵語であることを押さえておきたい。

これに続く場面では、上達部、親王たちを前にして、節会の論が展開される。相撲の節を目前に控え、「一切に労ある」節会を判定せよとの春宮の下問に正頼が答えるが、それはひどく場違いなものとなっている。すなわち五月五日に異常なまでに固執し、仲忠と涼の競演のあった吹上の重陽宴については軽く言及するにとどまるのである。正頼の念頭には、「祭の使」における端午の節

会の記憶がある。すなわち、この場では正頼は盛大な行事の挙行によって帝にも匹敵する權威を誇示していたのであった。しかし、正頼の節会論は、帝によって軽く一蹴され、帝は本来あるべき王権を取り戻し、発揚してゆくこととなる。

かく御物語したまふほどに、日夕影になれど、七月十日ばかりのほどに、なほ暑さ盛りなり。風なども吹かずあるに、人々、「少し、涼しう風も吹き出でなむ。さるは、今日、秋立つ日にこそあれ。しるく見ゆる風吹けや」など、上達部のたまふほどに、夕影になりゆく。めづらしき風吹き出づる時に、上、かくぞ出だしたまふ。

めづらしく吹き出づる風の涼しきは今日初秋と告ぐるなるべし

とのたまふ。御息所、御簾の内ながら、「げに、例よりも、今日は」とて、

いつともあきの気色はみすれども風こそ今日は深く知らすれ

と聞こえたまへば、上、「されど、まだ外にぞ侍る。

立ちながら内にも入らぬ初あきを深く知らする風ぞあやしき

そそと聞こゆる風なかりや」とのたまふ。

(三八一―三八二頁)

まさに立秋の日、待望の秋風が吹いてきた。帝の「めづらしく

「の歌は、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(古今集・秋上・一六九・藤原敏行)の風情である。女御の歌「いつとても」は、「あき」に「秋」「飽き」を掛け、秋風の吹く今日はいっそう冷淡さが身にしみた、と帝をなじつてみせる。帝の「立ちながら」は、私はまだ外で、御簾の内に入っていないのに「秋」の「飽き」を知らせる風とは妙なことですね、あなたにささやきかける他の風(兼雅)がいるのでしよう、の意。「吹く風に我が身をなさば玉簾ひま求めつつ入るべきものを」(伊勢物語・六十四段)とよく似た発想である。

秋の到来を宣言する帝の「めづらしく」の歌は、帝の主催する祝祭の時空の、いわば開会宣言になってはいまいか。巻頭から巻末まで、「内侍督」には、絶えず秋風が吹き続けているのだが、それはこの巻の非日常性・祝祭性^⑤と不可分に関わっている。そもそも、目に見えずして季節の到来を告げ、大きな威力を発揮する風に、古代の人々は神秘を感じていた。

夕暮れになりぬ。秋風、いと涼しく吹く。中將、

秋風は涼しく吹くを白妙の

など、御前の箏の琴を掻き鳴らしなごす。(中略)「世の中に、わびしき物は、独り住みするにまさるものなかりけり。あが君や、思し知らなむと聞こゆるは、わりなかりけり。今は、結ふ手もたゆく解くる下紐と聞こえさするも、いとなむかひなき。」あて宮、からうしていらへたまふ、「下紐解く

労ある秋の夕暮れ(大井田)

るは朝顔に」とか言ふことある。」中將、「同じく吹かば、この風も物の要にあたるばかりになりなむ」とて、

「旅人のひもゆふ暮れの秋風は草の枕の露も干さなむ

涙のかからぬ暁さへなきこそ。」藤壺の御いらへ、

「あだ人の枕にかかる白露はあき風にこそ置きまざるらめ

忘れたまふ人々も、なうはあらじかし。」(中略)

中將、「いでや、もどかしうこそあれ。

吹きわたる下葉多かる風よりも我をこちてふ人もあらな

む」(四〇五〜四〇七頁)

帝に弹琴を命ぜられた仲忠は、藤壺のもとに逃げ隠れる。そこでのやりとりであるが、折しも吹いてきた秋風に触発されて、あたかも何かに憑かれたかのように、仲忠は藤壺への愛情を切々と訴えるようになる。「結ふ手もたゆく」は、「思ふとも恋ふとも逢はむものなれや結ふ手もたゆく解くる下紐」(古今集・恋一・五〇七・詠み人知らず)による。相手が自分のことを思っていると自然に下紐が解ける、という俗信による。藤壺の「下紐解くるは」は、「我ならで下紐解くな朝顔の夕影またぬ花にはありとも」(伊勢物語・三十七段)を踏まえる。「二人して結びし紐を一人して我は解き見じただに逢ふまでは」(万葉集・卷一二・二九一九・作者未詳)のように、男女が再会するまで互いに下紐を解かずにいるという風習があった。いずれにせよ、かなり露骨で性的な言葉の応酬となつてることが知られよう。以下、「あき

「風」を核とした和歌の応酬が続く。藤壺の「あだ人の」の和歌の「あき風」には、もちろん「飽き」をかけ、仲忠が多くくの女性を忘れ去ったことを難じる。仲忠の「吹きわたる」の歌の「下葉多かる風」は、多くの妃を持つ春宮をいい、「こち」に此方の意と、「東風」を掛ける。いつもは「まめ人」とされる仲忠が、言葉遊びの次元であるにせよ、色好みへと変貌し、これほどまでに藤壺に迫るのは、吹く秋風に刺激されてのことである。ここにも、恋する人の情念を狂おしく掻き立てる、魔力にも似た、風の神秘の威力を認めてよいだろう。

ことに秋の夜の更けゆき、宴の松原の、仁寿殿にあり、ありけむ風に調べ合はせて弾くに、あはれに面白きこと、物に似ず。(中略) この琴に手触れたまふにつけて、よろづ昔のこと思ほえたまひて、あはれなること限りなし。親の御手より弾き取りし、中将にかの山にて習はせしこと、また、この里に出でむとて弾きし南風の声など、よろづにあはれなりし古事を湧くことおぼえて、世間ものあはれに悲しくおぼえれば、やうやう心ある手ども弾きかかりて、あはれにおぼえて遊ばず時に、皆人、上中下、楽人どもも、楽屋の遊びの人も、遊びやみて、ただこれを聞き愛でて、「あやし。この参りつる人は、誰ならむ。ただ今の世に、盛りのよしと言はるる中にも、かくばかりの琴弾くべき人の思ほえぬかな。誰ならむ」と、皆驚きつつ(中略) 御前なる日給の簡に、尚侍に

なすよし書かせたまひて、それが上に、かくなむ。

(帝) 目の前の枝より出づる風の音は離れにし物も思ほゆるかな(中略)

(源季明) 風の音は誰もあはれに聞こゆれどいづれの枝と知らずもあるかな(中略)

(藤原忠雅) 武隈の塙の松は親も子も並べて秋の風は吹かなむ(中略)

(源正頼) 塙より吹き来る風の寒ければむべもこ松は涼しかりけり(中略)

(藤原兼雅) ふけまさる松より出づる風なれやことなるなみの涙落つるは(中略)

(源実正) 年経れど枝も移らぬ高砂は隣の松の風や越えまし(中略)

(藤原正仲) いにしへの松は枯れにし住江の昔の風は忘れざりけり(四二六〜四三二頁)

卷末、俊蔭女の演奏に感銘を受けた帝が、彼女を内侍督に任ずる位記に、太政大臣以下の公卿に署名させる場面である。「風」を共通語句とした唱和歌群となっている。ちなみに、「内侍督」は、とりわけ唱和歌の多い巻であり、宴ならではの高揚感を伝える。「松風」が琴の音の喩であることは言うまでもない。忠雅の歌の「武隈の塙」、実正の「高砂」、正仲の「住江」は、いずれも相生の松で知られる歌枕であり、すなわち俊蔭女と仲忠をた

とえ、賞賛する。また正仲の歌の「いにしへの松」は亡き俊蔭をさし、「昔の風」に琴の一族の遺風の意を込める。

そもそも、物語の発端から、琴の一族と「風」とは深い関わりがあった。「唐土に至らむとするに、仇の風吹きて」俊蔭は波斯国へと漂着した。そこで得た秘琴には、「南風」「波斯風」のごとく「風」の命名がなされ、その三十もの琴は「旋風」が巻き上げて、送り届けたのであった（以上、俊蔭）。いったい、俊蔭の漂流とは、冥冥の力によって導かれたのではなかったか。「内侍督」でも、首卷「俊蔭」との照応をはかりつつ、「風」の不可思議な神秘が語られているといえよう。

二 葎と蓬、竹取引用

「内侍督」に頻出する鍵語の一つに「蓬」「葎」がある。

女郎花いやしき野辺に移るとも蓬は高き君にこそせめ

(三九七頁)

これは、「薄く濃く色づく野辺の女郎花植えてや見まし露の心」という朱雀院の謎かけの歌に答えた、兼雅の歌である。すなわち「女郎花」に帝の寵妃である仁寿殿を、「蓬」に自身を喩えて卑下している。

右近大将、「左の幄にて、大将の、かはらけ賜ひて、闕巡を賜ふことありければ、こよなく食べ酔ひて、深き葎の下に

勞ある秋の夕暮れ(大井田)

なむ隠れて侍りける。草の中に笛の音のし侍るを尋ねてなむ。」(中略) 上、御かはらけ始めさせたまひて(中略)、仲忠に、

(帝) 百敷を今は何ともせぬ人の誰と葎の下に臥すらむ
(中略)

(仲忠) 百敷に知る人もなき松虫は野辺の葎ぞ臥しよかりける
(中略)

(春宮) 松虫の宿訪ふ秋の葎には宿れる露や物を思はむ
(中略)

(仲忠) 同じ野に宿をし貸さば松虫の秋の葎を頼みしもせじ
(四二一〜四二三頁)

藤壺のもとに隠れていた仲忠が探し出され、帝の御前に召された。仲忠の言い訳の「葎」を要とした和歌の応酬の場面である。

藤壺との仲をからかう帝の歌に対し、自らを「葎(藤壺)」にふさわしい「松虫」にたとえて仲忠は開き直る。春宮の歌は、自身を「露」になぞらえ、藤壺と仲忠の関係を付度している。続く仲忠の歌は、「同じ野」に、正頼邸であて宮と一緒に育った女一宮を寓し、宮の降嫁を願う、機知に富んだものとなっている。「玉敷ける家も何せむ八重葎おほへる小屋も妹と居りてば」(万葉集・卷十一・二八二五・作者未詳)、「何せむに玉の台も八重葎生へらむ宿に二人こそ寝め」(古今六帖・第六・葎)のように、陋屋でも最愛の人と一緒にいられる幸福を、金殿玉楼との対比に

よって詠む例が多い。「玉敷ける家」「玉の台」である宮中(百敷)を舞台とするこの巻に、「蓬」「葎」が頻出するのは当然ともいえよう。次の例も同様である。

『御垣下に、隠れて物見候ふべき葎の陰なむある。なほまかり下りよ』と(仲忠ガ)ものし侍りつれば、常もそらごとしはべらぬを思ひたまへてなむ、玉の台まで候ひにける。」上、うち笑ひたまひて、「よそなれば、ここもかひなしや。御本意ありつらむ葎の下ならねば。」北の方、「今は、その葎も門鎖してなむ。」(四二四頁)

俊蔭女は、仲忠の「そらごと」に導かれ、「葎」ならぬ「玉の台」まで参上してしまったのだという。ここでの二人の会話は、前掲の六帖歌を踏まえているが、同時に「葎はふ下にも年は経ぬる身の何かは玉の台をも見む」(竹取物語)の影響も濃厚である。帝の入内の要請を、卑下しつつ断った、かぐや姫の歌である。既に指摘もあるように、俊蔭女はかぐや姫の面影を色濃く宿した女君であった。それは次の場面からもうかがえる。

『十五夜に、必ず御迎へをせむ。この調べを、かかる言の違はぬほどに、必ず十五夜にと思ほしたれ。』尚侍、「それは、かぐや姫こそ候ふべかなれ。」上、「ここには、玉の枝贈りて候はむかし。』尚侍、「子安貝は、近く候はむかし。」(四三七頁)

「十五夜」の連想から「かぐや姫」「蓬萊の」玉の枝」「燕の」

「子安貝」といった『竹取』にまつわる言葉の応酬がなされる。帝は八月十五夜の再会を約束するが、これはようやく最終巻「楼上」下巻に至って実現をみる。

「いかなる代はりをかはと思ひつるは。年ごろの心ざしのあらはるるにこそはありけれ。(中略)昔より、治部卿の朝臣(俊蔭)のありし時より、なほ、いささか、物の音を掻き鳴らして聞かせたまはなむと思ひて、御迎へせむと常に思ふことありしかど、朝臣のありし限りは、さらに、あやしく古めきの族にて、かかる筋のこともうとましげにやありけむ、たまたま『参らせたまへ』とものしかど、聞き入れられずなりにき。その後は、さらに、世の中に聞かえたまはずなりにしかば、心ざしのみ多くて、少しも知らせたてまつらずこそなりにしか。さるは、かく平らかにものしたまひけるものを。(中略)中ごろは、いづれの世にかものせられけむ。昔ながら対面賜はらましよりも、まして、心ざしまさることこそあれ。」(四二二〜四二三頁)

朱雀帝は、春宮時代から俊蔭女に想いを寄せており、たびたび入内を要請していた。しかし、「娘は天道に任せたまつる。天の掟あらば国母、夫人ともなれ、掟なくは山賤、民の子ともなれ。我、乏しく貧しき身なり。いかでか高き交じらひはせさせむ」(俊蔭・二二頁)という俊蔭の悲痛な判断によって、それも叶わなかった。俊蔭死後、しばらく消息も途絶えてしまい心配でなら

なかつたが、無事で安心した、というのである。長年の「心ざし」を切々と訴える帝に、俊蔭女は次第に心を開いてゆき、琴に触れようとする。

この琴に手触れたまふにつけて、よろづ昔のこと思ほえたまひて、あはれなること限りなし。親の御手より弾き取りし、中将にかの山にて習はせしこと、また、この里に出でむとて弾きし南風の声など、よろづにあはれなりし古事を湧くごとおぼえて、世間ものあはれに悲しくおほゆれば、やうやう心ある手ども弾きかかりて、あはれにおぼえて遊ばす時に

(四二七頁)

ここでは「あはれ」の語が集中的に繰り返されているのに注意されよう。すなわち、帝の「心ざし」が俊蔭女を感動せしめ、彈琴に踏み切らせているのである。「心ざし」「あはれ」がともに『竹取』の重要語であることは贅言を要しまい。かくや姫と帝のプラトニックな恋のかたちが、俊蔭女と朱雀帝のそれに重ね合わされているのである。とはいえ、俊蔭女と朱雀帝の恋は、天と地とに引き裂かれた、永遠の別れとして、悲恋に終わってしまうわけではない。「おもとには、みづからをやは得たまはぬ。中将の朝臣、紀伊国の祿には、娘をこそは得たれ」(四三〇頁)と、演奏の祿として、内侍督就任と、仲忠への女一宮降嫁が決定する。俊蔭女と帝の結ばれなかつた恋の結び直しとして、それぞれの子、仲忠と女一宮の結婚が導かれてくるのである。

勞ある秋の夕暮れ(大井田)

三 漢籍引用をめぐる

物語作者の漢籍・仏典の深い教養は、これまでも繰り返し指摘されてきたところであるが、とりわけ「内侍督」では突出している。作者の並々ならぬ知識が、帝や仲忠の口を借りて、存分に披露されている。

仲忠奏す、「異仰せ言は、身をいたづらになさむ、蓬萊、惡魔国に、不死藥、優曇華を取りにまかれと仰せらるるとも、身の堪へむに従ひて承らむに、さらにこの仰せ言なむ、かかる所々に遣はさむよりも難き仰せ言なる」と奏す。上、うち笑はせたまひて、「になき勅使かな。さりとも、蓬萊の山へ不死藥取りに渡らむことは、童男、卯女だに、その使に立ちて、船の中にて老いて、『島の浮かべども、蓬萊を見ず』とこそ嘆きためれ。かの心上手のさる者だにつひに至らずなりにける蓬萊へ、今、朝臣の、日の本の国より、行くらむ方も知らず、不死藥の使したらむこと、少しわづらはしからむ。えや求め合はざらむ。(中略)かれも、南天竺より金剛大士の渡りけることは、むつまじき輩を隣の国より迎へ取りて、これあひ顧みると、時の国母の仇をいたしてなむ、さる使には出だしたりける。それ、南天竺より渡るに、自然に年経にたれば、忍辱の輩の別れに逢はずとは嘆かずや。それを、いかに、朝臣の国母の仇ありともなくて、また、さる

薬要する后ありともなくて、にはかに親を捨てて渡らむに、少しもののわづらひあり、不孝になりなむ。身の破れありなむ。かくになきことよりは、ただ、ここながら、調べたる一つ弾かむことは、易からむかし。あるまじき使には進まで、ただ、この琴を、手一つ掻き鳴らして聞かせなむ。(中略)朝臣、今宵の言ひ言を、さらばとて、悪魔国、蓬萊の山まで出だし立てむなむ、我、少しはかなき。まづは、我、かく目に近く見馴らしたるを、さる心すごき使に、遙かなるほどを出だし立てて思はむになむ、少しあはれに心細からむ。また、行きて見し人も、ただ今ものせらる、それが嘆き思はむを見むに、いとかひなからむかし。かく言ふほどに、不死薬をも、蓬萊に至らむと思はむほどに、ともかくもあらば、不死薬の死の薬も何にかはせむ。」(四一三―四一五頁)

帝との囲碁に負けた仲忠は、琴を弾くよう強要される。あくまで拒否しようとする仲忠と、是が非でも弾かせようとする帝の、ペダンティックな言葉の応酬であり、多くの典拠がちりばめられている。まずは、秦始皇帝の命を受けて蓬萊へと不死薬を求めに行った徐福の故事(『史記』秦始皇帝本紀、『白氏文集』『海漫』など)。また、かぐや姫から蓬萊の玉の枝を所望された、くらもちの皇子の偽りの漂流譚、不死薬を焼却した『竹取』の末尾。そして『金剛大士』については、多くの注釈書が未詳としてきたが、『大乘毘沙門経功德経』「善生品第二」に拠るらしい。か

ように多くの引用の重ね合わせからなる場面であるが、何よりも俊蔭漂流譚がここに強く意識されていることを見落としてはならない。遣唐使に選ばれたがゆえに、俊蔭は長年にわたって異国をさすらい続けた。老いた父母を嘆かせたことで、不孝の罪までも背負ってしまった。その怨みが俊蔭と嵯峨院とを訣別させた。しかし、朱雀帝は、そのような辛い思いを仲忠にも、俊蔭女にもさせたくない、と言うのである。俊蔭を苦しめてしまった父院の過ちを、朱雀帝は繰り返さない。いったい、この巻は首巻「俊蔭」を意識した叙述が多く、長篇の原点への回帰の志向が強いのだが、右の場面は、その典型といえる。

この巻の漢籍引用では、王昭君および蔡琰説話も主題にかかわって重要である。漢の皇帝が、盟約によって匈奴の王に妃を与えることとなった。七人の妃たちのうち六人は絵師を収賄して醜く自らの肖像を描かせた。皇帝の寵愛を恃んでいた王昭君は賄賂を贈らなかつたため、いっそう美しく描かれてしまった、という有名な説話である(『漢書』『西京雜記』など)。帝は、胡笳の琴曲について、次のように解説を加えている。

「かたち描き並ぶる絵師に、六人の国母は千両の黄金を贈る、すぐれたる国母は、おのが徳のあるを頼みて贈らざりければ、劣れる六人は、いとよく描き落として、すぐれたる一人をば、いよいよ描きまして、かの胡の国の武士に見するに、『この一人の国母を』と申す時に、天子は言変へずと言

ふものなれば、え否びず、この一人の国母を賜ふ時に、国母、胡の国へ渡るとて嘆くこと、胡笳の音を聞き悲しびて、乗れる馬の嘆くなむ、胡の婦が出て立ちなりける。(中略) げに、さる天皇の正妃として、一の後とてありけむに、さる武士の手に入りけむ心地、いかなりけむと思ふに、まして遊ばしますさまのことなるこそ、いみじくあはれなれ。」

(四二八～四三〇頁)

「天子は言変へず」とは、巻頭の「天子そらごとせず」(三七九頁)の発言に照応している。さらに匈奴に囚われた悲運の女性として王昭君から蔡琰(文姬)へと連想が及ぶ。「胡の国へ渡るとして」以下は、蔡琰の故事を踏まえる。都を遠く離れ、胡の国でのわびしい日々を送る彼女たちの姿は、北山のうつほの俊蔭女に對應しよう。そして境遇の類似だけでなく、より深いところで蔡琰と俊蔭女の関わりが認められるようである。すなわち蔡琰の父、蔡邕は大学者として知られ、琴をよくした。『琴操』の著者ともいわれ、焦尾琴の故事は有名である(『後漢書』列伝第五十)。その楽才を受け継ぎ、蔡琰も琴に堪能であったようで、幼くして父の弾き絃を聞き分けたという、いわゆる「蔡琰弁琴」もよく知られている(『蒙求』)。この父娘が、俊蔭父娘の造型に少なからず投影しているはずである。ともあれ、最愛の妃を手放さざるを得なかつた漢の皇帝に自らを重ね合わせることで、朱雀帝は俊蔭女への執着をますます深めてゆくこととなる。

労ある秋の夕暮れ(大井田)

四 労あり

優艶な場面の続く「内侍督」にあつて、巻末の右の場面はひときわ印象的である。

上、いかでこの尚侍御覽ぜむと思すに、大殿油、物あらはに灯せば、ものし、いかにせましと思ほしおはしますに、螢、おはします御前わたりに、三つ四つ連れて飛びありく。

(中略)尚侍の候ひたまふ几帳の帷子をうち懸けたまひて、物などのたまふに、かの尚侍のほど近きに、この螢をさし寄せて、包みながらうそぶきたまへば、さる薄物の御直衣にそこら包まれたれば、残る所なく見ゆる時に、尚侍、「あやしむのわざや」とうち笑ひて、かく聞こゆ。

衣薄み袖のうらより見ゆる火は満つしほたるる海女や住むらむ

と聞こえたまふさま、めでたき人の物など言ひ出だしたる、さらなり、し出だしたる才など、はた、いとめでたく心憎き人の、その容貌、はた、世に類なくいみじき人の、さる労ある物の光ほのかに見ゆるは、まして、いとなむ切なりける。上、御覽するに、たとふべき人なく、めでたく御覽すること限りなし。かくて、いらへたまふ、「年ごろの心ざしは、これにこそ見ゆれ。

しほたれて年も経にける袖のうらはほのかに見るぞかけて

うれしき」

上、おはしまして、よろづにあはれにをかしき御物語をしつ
つおはしますほどに、夜曉になりゆく。(四三七〜四三八頁)
螢火に照らし出される俊蔭女の姿は、妖しいまでに美しい。帝
の、彼女に寄せる長年の「心ざし」がついに報いられることと
なった。実は、この場面は、巻頭の、帝の心中思惟と首尾呼応し
ている。

この女御(仁寿殿)と大将(兼雅)と、さてあらむに、な
かるまじき仲にこそありけれ、これを、同じ所に、労あらむ
所に据ゑて、情けあらむ草木、花盛りにも紅葉盛りにもあ
れ、見所あらむ所の夕暮れなどありて、行く先を言ひ契り、
深き心言ひ契らせ、かたみにあはれならむことを、心とどめ
てうち言はせ、をかしきさまにあらせむに、けしうはあら
じ。(中略)さてあらせて聞かばや。(三九七頁)

男(兵部卿宮)も女(承香殿)も、かたみに見交はして
は、げにげに、身はいたづらになるとも、我にても、ただに
ては、えあらじかし、見るに、男も女も、深き労ありけりと
も、いとどおほゆるかな、かかる仲の、さすがに、色に出で
てはえあらず、思ひ慎むことありて、その中に、なでふこと
を言ひ尽くすらむ。(中略)かれを聞き見るものにもがな。

(三九九頁)

いずれも、人知れず愛し合う「労ある」男女を、夕暮れ時の「労

ある」場に配して、交わされる愛の言葉を聞いて見たい、という
のである。ちなみに「労あり」も、この巻の鍵語である。経験を
積んで洗練されている、男女の恋の機微に通じている、配慮が行
き届いている、などの意であるが、人の性格についてのみ用いら
れるわけではない。「涼の朝臣の吹上の浜にもものしたりし時に、
仲忠いと切に労ありしかば」(三七九頁)、「年の内出で来る節会
の中に、いづれ、いと切に労ある、定め申されよや」(三八一
頁)、「嵯峨帝承香殿女御ノ御文見たまへしこそ、よにあはれ
に労ありしか」(三八八頁)、「労ある秋、夕暮れ」(四一三頁)な
ど様々に繰り返され、変奏される。

こうした帝の企ての延長線上に、帝と俊蔭女の対面の場面があ
る。いわば、それまで優艶な恋の場面を演出し、かつ観客の立場
にあった帝は、自ら主役として舞台に立つてみせるのである。こ
こには、日常から解放された恋愛遊戯——「そらごと」の世界に
こそ、人間の真実の姿がある、という物語の強い主張があるはず
である。

むすび

「吹上の宣旨」が「そらごと」となった不明を恥じる帝は、自
ら「そらごと」の世界を演出し、ついには恋物語の主人公を演じ
るに至った。それは、宮中の多くの人々をも巻き込む、大がかり

な芝居ともなった。この巻の焦点となる出来事は、巻名でもある、俊蔭女の内侍督就任であるが、それは、さまざまな言葉と動機の繰り返しを通じて、しだいに現実味を帯びてくるのである。「行く末までも、私の后に思はむかし」とは、「昔よりかやうならましかば、今は国母と聞こえてましかし」（四三六頁）という帝の悲願の実現であると同時に、「天の掟あらば、国母、夫人ともなれ」（俊蔭・二二頁）という俊蔭の遺志の実現であった。実は、この巻は、苦悩と憤懣のうちに世を去った、俊蔭の霊を鎮魂、慰撫するために要請された巻だったのでないか。日常を逸脱した風変わりな物語の展開と結末は、帝の思惑によるだけでなく、亡き俊蔭の遺志に導かれているようにも思われる。

俊蔭女が内侍督に任じられたとて、まだ俊蔭の慰霊は充分ではない。孫仲忠の栄達、秘琴の伝承者いぬ宮の誕生、そして朝廷からの謝罪など、今後なされねばならぬことは多い。物語は、ようやく折り返し点に辿り着いたばかりである。

本稿では、鍵語と動機の反復と変奏という観点から、「内侍督」について論じてきた。同語の繰り返しとは、曲のない、稚拙な表現のように思われがちであるけれども、むしろ何度も反復され、変奏されることで物語の主題性が強靱かつ明確になってくる。物語中随一の達成を誇る、この巻の表現を考察してみたのである。

労ある秋の夕暮れ(大井田)

注

- (1) 拙著『うつほ物語の世界』（平成十四年、風間書房）第六章「うつほ物語」の転換点―「内侍督」の親和力―
- (2) 野口元大『うつほ物語の研究』（昭和五十一年、笠間書院）Ⅲ四「内侍督」の定位と「原」吹上下―
- (3) 室伏信助『王朝物語史の研究』（平成七年、角川書店）第二章「内侍督」巻の成立と作者―
- (4) 三上満『宇津保物語・初秋巻の方法』（『中古文学論攷』第五号、昭和五十九年十月）
- (5) 「内侍督」をめぐる祝祭の論理については、高橋亨『物語と絵の遠近法』（平成三年、ペリかん社）第四章「長編物語の構成員―宇津保物語―初秋」の位相―参照。
- (6) 「内侍督」の引用漢籍・仏典については、上原作和『光源氏物語の思想的変貌（琴）のゆくへ』（平成六年、有精堂）第一部「琴曲―胡笳」と王昭君説話の複次的統合の方法について、Ⅱ「金剛大士説話と朱雀帝・仲忠、問答体説話の方法について」、上原作和・正道寺康子『うつほ物語引用漢籍注疏 洞中秘抄』（平成十七年、新典社）が詳しい。また、「竹取」引用については、上原作和「文学史上の『竹取物語』（曾根誠一・久下裕利・上原編『竹取物語の新世界』平成二十七年、武蔵野書院）参照。
- (7) 須見明代「宇津保物語における俊蔭女」（『東京女子大学日本文学』第三十九号、昭和四十八年三月）

*本文の引用および頁数は、室城秀之『うつほ物語 全』（平成七年、おうふう）により、適宜表記を改めた。

キーワード…うつほ物語、内侍督、俊蔭、そらごと、秋風、蓬・葎、

労あり

Abstract

Beautiful autumn evening: Expression of *Naishi no Kami* of *Utsuho Monogatari*

Haruhiko Oida

Naishi no Kami (Early Autumn) of *Utsuho Monogatari*, is important chapter that connect the first half portion and the rear half portion.

Nakatada and *Fujitsubo*, *Kanemasa* and *Jizyuuden*, *Toshikage no Musume* and *Emperor Suzaku*, these couples had loved each other, but could not be married. In Sumo festival, they enjoy love games.

In *Naishi no Kami*, there are many mistakes and contradictions. For example, in Fukiage, *Emperor Suzaku* commanded that *Msayori* should marry *Atemiya* off to *Suzushi*, the First Princess off to *Nakatada*, but this royal command changed in *Naishi no kami*. *Nakazumi* who had died in shock of *Atemiy's* bridal appears in this Chapter. Other Chapters had rewritten, but *Naishi no Kami* had not rewritten because of sophisticated representation. Thus these conflicts caused.

Some keywords and motif are repeated many times in this chapter. In *Naishi no Kami*, autumn wind is blowing all the time. *Yomogi* (wormwood) and *mugura* (sagebrush) reminisce deep affection and Platonic love of *Kaguyahime* and the Emperor of *Taketori Monogatari*. The episodes of *Zyohuku* and *Kuramoti no Miko* reminisce *Toshikage's* drift. This Monogatari tries to return to starting point. *Naishi no Kami* was the requiem for *Toshikage*.

By repetition of keywords and motif, theme of this chapter has been emphasized.

Keywords: *Utsuho Monogatari*, *Naishi no Kami*, *Toshikage*, soragoto (lie), akikaze (autmun wind), yomogi (wormwood) and mugura (sagebrush), rou-ari (elegant)